

年月の過ごし方

福田浩尚

年賀状などの挨拶に「このごろ月日のたつのが速くなったように感じられます」とか「あつという間に月日が過ぎていくように思います」という趣旨のものが多い。当然ながら、物理的に年月が速くなったとか、地球の回転が速まったということとは聞いてないので我々の意識の問題だろうと思う。特に、年齢を重ねるとまことに年月のたつ速さを、一層強く感じるらしい。それはまた、残っている人生を無意識か意識的か分からないが気にしているせいではなからうかと思う。

時間学という学問の分野がある。物理学、医学、哲学等あらゆる分野から時間というものを総合的に研究しようとする新しい学問で山口大学には研究所もありれっきとした学問分野とのことである。この研究所では例えばこんな実験例がある。対象者は4歳〜82歳の約3500人、自分が3分と感じた時点でボタンを押してもらったところ年齢が高くなればなるほど実際の3分より長くなる傾向がでた。つまり、年をとればとるほど「実際の時計」より「心の時計」の進み方が遅くなるため、時がたつのを早く感じるというわけだ。この研究者によると、心の時計に影響を与える要因は、様々あるらしい。例えば、代謝、感情、時間に注意を向ける頻度、印象に残る出来事の数、刺激等などらしいがここでは省略する。（興味のある方は読売新聞2011年1月13日、夕刊をご覧ください）

私が小学校のころは甘いお菓子もあんまりなく、森永の黄色い箱のキャラメルが私のもっぱらのおやつだった。20円でたしか16粒入っていて、私はよくしやぶりながら机に向かったものだ。甘いものに飢えているから始めはどんどん食べてしまう。がやがて、残りが2~3粒しかないことに気づく。すると、もったいないという気持ちが出てきて、できるだけゆっくり味わって食べようという気持ちになる。最後の一粒は始めの何倍も時間をかけてよく味わって食べる。今、この人生の晩年期にあつてわたしはこのキャラメルを食べた頃の心境を思い出す。この私の人生は時間にしたらあの残り少ないキャラメルのようにいくらも残っていない筈である。残された人生の時間をできるだけじっくり味わっていくべきだと考えたりする。

人生をじっくり味わって生きていく時間の過ごし方とは一体どういうことなのだろうか。昔読んだ、カミユの「異邦人」にはこんなことがあつたという覚えの記憶がある。この小説は不条理の追求とか言つて主人公が暑さのあまり殺人を犯すというのがモチーフでそのことに対しては私には難しくてよく分からない。だが、この小説の中で、有意義に人生を過ごすことはどういうことか、それは、時間の経過をできるだけ意識して生きることだ。じっくりかみしめるように味わつて生きるということとは、たとえばなかなか来もしないバスを停留所でゆっくり待つことのように時間の経過を認識して過ごすことだ。まだか、まだかという心の中で意識で時間の経過を感じるときは時間が長く感じ

る、一方短くて時間のたつのを忘れたなどということ
は、有意義な過ごし方とは言えないのではなからうか。

仮定の話をつたそう。

その1、なにか犯罪を犯して懲役何年かの刑をくら
い牢屋生活を余儀なくさせられたとする。釈放される
までの何年間はなんと長い年月に感じられだらうか。
毎手指折り数えて時の過ぎるが遅いと思うだらう。

その2、心から愛する人とおいしい食事をしている
としよう。会話もはずみ、食事もすばらしい。そのと
きこの時間がいつまでも続けばいいなあ、時間のたつ
のが実に速く思われることだらう。時間の経過なのに、
人はまったく正反対の認識をする。人は結果を予測し
ながら時間を過ごす、つまりそれが人が生きているあ
かしだからだと思う。牢屋に入っているときは、釈放
されるという希望を待って過ごす。幸福な食事を好き
な人としている時は、この時間がいつか終わるとい
う認識がある。片方は長く、一方は短く感ずる。

年賀状で、時のたつのがこのごろ実に速く感じられ
ますなどと書くのはおそらく今この幸せがいつか終わ
るということとを予測しているからかも知れない。

人生は、小さい1箱のキャラメルにも似ている。残
り少なくなると寂しくなり、時間の歩みを遅らせよう
としてなのか、ゆっくり食べようとしたりする。終わ
り

2011年2月